

住まうことと語ること  
——石牟礼道子『苦海浄土』の沈黙と亀裂へ向けて——

宮田晃碩（東京大学大学院 総合文化研究科）

【発表要旨】

ハイデガーの「存在論」は何らかの「倫理学」による補足を必要とするのではないか——そのような疑念に対し、「『ヒューマニズム』についての書簡」においてハイデガーは、次のように答える。即ち、エートス (*ἦθος*) という語の根本的な意味に従って、倫理学 (Ethik) が「人間の滞在・居住 (Aufenthalt) を熟考する」ものでなければならないとすれば、彼の思索はまさにそのような課題を遂行する「根源的倫理学」にほかならないのだ<sup>i</sup>。だがハイデガーは「いかに住まうべきか」について具体的な行為の規範を示すというわけではない。とすれば我々はいかにして、彼が言うところの「根源的倫理学」を受けとめつつ、我々自身の事実的状况において「居住を熟考する」ことができるだろうか。

この課題にとって道標となるのは、ハイデガー自身の思索が、詩において語られていることへの聴従を目指して遂行されているということ、そしてハイデガーが次のように指示を与えているということである。即ち——「住まうことの本来の困窮は〔…〕死すべき者たち〔＝人間〕が住まうことをまずもって学ばねばならないということに存する」のであり、「死すべき者たちを住まうことへと呼ぶ、唯一の言い渡し」とは「故郷喪失」にほかならないのだ<sup>ii</sup>。それゆえ我々は、「住まうことを学ぶ」ため、ある詩作的な言葉への聴従を目指し、以て我々自身の「故郷喪失」を熟考する可能性を拓きたい。本発表が取り上げるのは、石牟礼道子『苦海浄土』における言葉である。

第一に考察されるのは、『苦海浄土』の中でも水俣病患者の語りを方言のままに記した「聞き書き」と呼ばれる箇所が、言葉としてどのように働くものかということである。我々はこれをハイデガーの1950年の論考「言葉」に即して分析する。ハイデガーは、トラークルの詩を引用しながら、言葉を人間の伝達手段などとして捉えるのではなく、ひとえに言葉として経験することを、言い換えれば「言葉が語る (Die Sprache spricht)」という事態への聴従を求める。彼が第一に指摘するのは、物と世界への呼びかけとしての、言葉の働きである。この指摘に従って我々は、聞き書きにおける語りや、語り手の内面の吐露といったものではなく、まさに物と世界に呼びかけ、その物のもとに、その世界のうちに住まうことを言葉にもたらすものなのだ、と理解できる。

だが「聞き書き」は、ただ調和的な世界を描き出して、そこに不安なく我々を安んぜしめるといったものではない。寧ろそこで語られるのは、世界との失われた親しみなのであり、

しかも彼らの語り自体が、抑圧され沈黙を強いられた者たちの、いわば「幻視」において語られる語りなのである。ここに我々は、呼びかけられる世界の「不在」、そして我々とその世界とを隔てる「遠さ」を見出さざるを得ない。この点に関してハイデガーの思索は何を示唆するだろうか。実のところ言葉についてのハイデガーの思索は、まさにこの遠さないし隔たりの根源へ向けられていると言えるのである。彼が示す、言葉は根源的に「静寂の鳴り響き」として語り、「死すべき者」としての人間はそれに応答する限りにおいて語るのだということ、そのようにして初めて人間は住まうに至るのだということ、そしてこの「静寂の鳴り響き」は、物と世界との間を統べる「区 - 別 (Unter-Schied)」として性起するのだということ、この区 - 別はしかも「裂け目」として、「痛み」として性起するのだということ——こうしたことどもを手掛かりに、我々は聞き書きの言葉をどのように経験し得るのか、考えることができる。「不在」ないし「遠さ」とは、そこで呼ばれる世界が単にもはや過ぎ去ってしまったということの意味するのではなく、寧ろその世界が世界として呼びかけられる限り、我々が言葉の語りかけを聴き取り、その「痛み」を耐え抜かねばならない、ということを示すのである。この課題に関して我々はさらに、石牟礼がいかに「痛み」を経験し、また「死」を近付けているか、検討することができる。とりわけ死を通じて人間ならぬ「生類の世界」に接近する仕方は、ハイデガーと好対照を成すようにも見える。

最後に我々は、呼びかけられる世界の遠さばかりでなく、そのように呼びかける語り自体の遠さをも熟考せねばならない。前者を「第一の故郷喪失」と呼ぶなら後者は「第二の故郷喪失」であると言えよう。我々は聞き書きにおいて語られる故郷喪失を、直接に自らのものとして経験するとは言えまい。だがそのような語り、我々の言語のうちで沈黙させられているということならば、共に経験できるのではないか——この問題は、ハイデガーが現代技術に見て取る「最大の危険」とも関連していよう。『苦海浄土』に刻まれた「沈黙」と「亀裂」は、我々自身がその喪失の響きに聴従する可能性を示すものである。

---

<sup>i</sup> „Brief über den »Humanismus«“ in *Wegmarken* (GA9), S. 354.

<sup>ii</sup> „Bauen Wohnen Denken“ in *Vorträge und Aufsätze* (GA7), S. 163f..